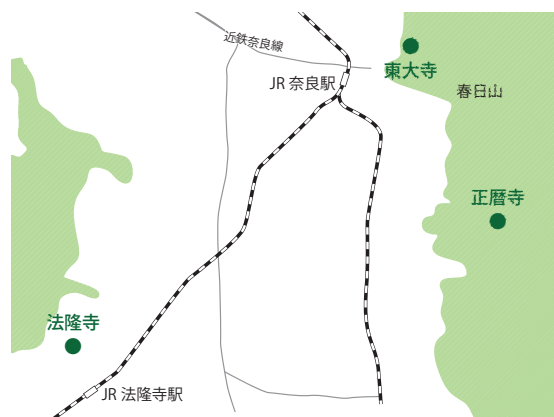




今月の特集

まほろばの 里を訪ねて

古都・奈良で見つけた
日本人の心の原点



斑鳩の里を歩き、
法隆寺へ

梅雨明けも近い6月のおわり、筆者は自宅がある京都山科を後にして古都・奈良へと向かいました。JR京都駅から約1時間、電車は法隆寺駅に到着します。薄陽のさす市街地をしばらく歩くと、法隆寺の五重塔が緑の木々の向こうにうつすらと見えてきました。

法隆寺は7世紀に創建された仏教寺院で、1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」として、日本で最初の世界文化遺産に指定されました。とくに西院伽藍は現存する世界最古の木造建造物として知られ、仏教文化の研究の宝庫として、近年ますますその価値が高まっています。境内には南大門、五重塔、金堂など、19棟の建造物が並び、往時にタイムスリップしたかのような神秘的な雰囲気を楽しむことができます。

この近辺には、藤ノ木古墳をはじめ数多くの古墳があり、古くから文化の中心であったことが伺えます。とはいえ6世紀初頭の日本は、各地に点在する豪族がそれぞれの領地を



治める地方分権の時代でした。卑弥呼で知られる邪馬台国もそのひとつだったでしょう。

そんな時代が終わりを告げ、日本が天皇中心の中央集権国家へと移っていくのが、まさに法隆寺が創建された飛鳥時代なのです。

西暦593年、ひとりの若者が推古天皇の摂政となりました。その男の名は厩戸皇子^{うまやどのみこ}、またの名を「聖徳太子」といいます。この日から、日本は中央集権国家へと歩み始めることとなります。

ここから始まる歴史区分を「飛鳥時代」といい、聖徳太子が政治を行った場所を斑鳩宮といいます。

和をもって尊しとなす

日本人なら誰でも一度は聞いたこ

とのある、あまりにも有名な言葉です。

これは聖徳太子が定めた「十七条憲法」の冒頭の文言で、現代語訳すると「何をするにしても、みんな仲良く争わないように」となります。同時に「意見が違うときは、しっかりと議論しなさい」という意味も含まれます。

聖徳太子は推古天皇（女帝）の摂政（天皇に代わって国の政治を行う人物）として、日本の政治・外交・文化の発展に尽力した人物です。

遣隋使を派遣して中国のあらゆる制度を学び、十七条憲法や冠位十二階を制定して国家の礎を築きました。

十七条憲法とは、日本最古の憲法で、貴族や官僚など政治に関わる人々に向けて道徳や心がけを説いたもの。冠位十二階は、各地の豪族を序列化した位階制度で、出自に関係なく優秀な人材を登用することを目的としています。また国司・国造を各地に派遣して、天皇が全国を治めるシステムを作り上げました。

それと同時に、信仰を人々の心の拠りどころとするため、仏教や儒教を積極的に取り入れました。彼が法隆寺や四天王寺を創建したのはその

ため：などなど。聖徳太子が残した業績は、ここでは語り尽くせないほど莫大なものです。彼がめざした天皇中心の政治は、その後、中大兄皇子らに受け継がれ、645年の大化の改新、平城京、平安京の建設へと続いているのです。

そんな聖徳太子ですが、じつは「実在しなかった」という説が、近年クロージアアップされています。これはどういうことでしょうか？

厩戸皇子という人物はたしかに存在しましたが、それが「聖徳太子」であるという証拠はないのだとか。まして前述のような数々の大事業を、短期間のうちにひとりの若者が実行できるものか？複数の人物が関わっているのではないか？…など、疑問の多い人物であることは確かかなようです。

しかし、聖徳太子が実在の人物であらうとかならうと、「和をもって尊しとなす」という憲法を作った人物が日本にいたことは、まぎれもない事実です。

「日本国民は国際平和を希求し、戦争を永久に放棄する（概要）」とは、現在の日本国憲法の一節。奈良時代から現代に至るまで、日本人すべての「平和を願う心」は、永遠に変わらない心の原点なのかもしれません。



～奈良・飛鳥時代の年表～

- | | |
|------|---------------------|
| 592年 | 推古天皇が即位する（飛鳥時代が始まる） |
| 593年 | 聖徳太子が摂政になる |
| 603年 | 冠位十二階を定める |
| 604年 | 十七条憲法の制定 |
| 607年 | 聖徳太子が法隆寺を建立 |
| 609年 | 小野妹子を隋に派遣する（遣隋使） |
| 630年 | 第1回遣唐使の派遣 |
| 645年 | 大化の改新 |
| 701年 | 大宝律令を制定 |
| 710年 | 平城京に都を移す |
| 752年 | 東大寺建立 |
| 794年 | 平安京に都を移す（ここから平安時代） |



若草山から 東大寺をめざす

筆者は法隆寺をあとにして、東大寺へと向かいました。

JR奈良駅にほど近い若草山の麓に建ち、奈良の大仏で親しまれている寺院です。こちらも世界文化遺産に指定されており、奈良県を代表する観光スポットのひとつです。

参道を歩くと愛らしい鹿たちが出て迎えてくれます。金剛力士像で有名

な南大門を通過して大仏殿へ。中へ入るなり、大仏が息を呑むほどの迫力で迫ってきます。

天皇の権力が大きくなるにつれ、斑鳩宮へ藤原京へ平城京と都が移っていきました。遣隋使や遣唐使は、中国から律令制度、法律、さまざまな芸術・文化を持ち帰り日本の発展に寄与しましたが、一方でやっかいな客も持ち帰りました。

ウイルスです。

特に天平年間に大流行した天然痘は悲惨なもので、律令国家を作り上げた藤原氏の4人の息子が次々と亡くなったほか、日本は人口の3割を失うほどの大惨事となりました。

聖武天皇が東大寺の大仏を建立したのは、そんな国難に立ち向かう決意の表明だったかもしれません。

その頃の記録を見ると、国からのお達しが事細かに書かれていて興味深いものがあります。病人には近づくな。儀式・集会の禁止。隔離された者と接触した者も数日間隔離…。

ウイルスはおろか、病原菌の存在さえも知らなかった時代に、経験に基づく衛生行政を行っていたというから驚くばかり。日本人の生真面目

さは、千年の昔から変わっていないことに安心しつつも同情を禁じ得ません。

清酒発祥の地を訪ねて

古都・奈良での取材を終える前に、どうしても訪ねてみたい場所がありました。それは正暦寺という古刹。

正暦寺は奈良市南東部の山間にあります。紅葉の名所として人気の寺ですが、いまは新緑の中にありました。石段を登ると石垣の上に建つ古い本堂が見えてきます。

正暦寺は992年に賢俊僧正が建立した真言宗の寺院ですが、愛好家の間では、清酒（日本酒）発祥の地として知られている寺でもあります。

室町時代の酒造記に、正暦寺で作られている清酒の製造方法が詳細に

記載されています。この寺で開発された「諸白」「菩提もと」「三段仕込み」「火入れ」という製法が近代の日本酒醸造法の基礎とされているのです。

それまでの酒は濁り酒が主体でした。ところが、正暦寺で作られた酒は現代で飲まれている日本酒と同じく、澄んでいて腐敗することなく、しかも美味であったため、貴族たちの間で大いに重宝されたといえます。

現在では毎年1月に「菩提もと清酒祭」が開催されており、菩提もと清酒の試飲販売会が行われているとのこと。時期があわず筆者は嗜むことができませんでしたが、ここもまた日本人の心の故郷といえるかもしれません。

正暦寺を出て、しばらく付近を散策してからJR奈良駅へと向かいます。途中、タクシーの窓から夕焼けに紅く染まる東大寺が見えました。この美しい風景が、未来永劫に続きますように。そして日本がいつまでも安寧でありますように…。

そんなことを考えながら、筆者はまほろばの里をあとにしました。

(了)